

『財政学散歩』と宮本憲一先生

写真は 2016 年 9 月 4 日発行の宮本背広ゼミ機関誌の通刊 21 号である。「2016 宮本先生日本学士院受賞記念」とあるように、宮本憲一先生とゼミ生にとって記念すべき機関誌だ。なにはともあれ、宮本先生の「日本学士院賞受賞をめぐって」を抜粋して紹介したい。



日本学士院賞は 1911 年に創設され、戦争中も絶えることなく続いていて、日本の研究者にとって最も権威のある表彰である。戦前は帝国学士院と称していたが、戦後は文科省の所管になっており、国際的に公認されている The Japan Academy である。これとは別に戦後、「学者の国会」と言われた日本学術会議が誕生した。これもアカデミーと呼んでよいが、性格と政府所管が異なる。日本学術会議は主要学会から選出された研究者代表者の会議で、科学・学術政策について政府に政策提言を行う権限があり、政府はこれに応える義務がある。所管は内閣府に属し、任期は 6 年である。これに対して日本学士院会員は終身制であり、選出は会員の選挙で決まる。したがって、学会との直接のつながりが少なく、平均年齢も高く、学界の長老で構成されている。学術会議のように政治的な力はなく、「養老院」と批判されることもあるが、学術的な権威は高い。

106 年を経た日本学士院賞は受賞者の 80%以上が自然科学者である。文系の場合は社会学者特に経済学者の受賞者は戦前にはほとんどいない。公害、環境問題での受賞は初めてであろう。歴史が浅く学際的な分野の研究は、専門分化の激しい学界の中では選考が困難であったと思う。その意味で、私の受賞は伝統的なアカデミーがようやくこの分野に目を向けたので、今後若手の研究者への門が開けることになれば幸いである。

授賞式の際にポスターセッションのように研究成果を展示する。これは加藤正文につくってもらい、日本公害地図を中心に水俣、原発、アスベストの災害の説明写真や、私の著書とその韓国版、中国版、台湾版を並べた。これは一般公開するのだが、慣例で一般公開前に天皇皇后両陛下に説明をして、質問に答えねばならない。驚いたことに 1 人 3 分以内で済ませてくれというのである。50 年の研究成果で、約 800 ページの著書をどのように 3 分間で話すのか。



この後帝国ホテルで文科大臣の招宴が行われた。ここでは受賞者夫妻がそれぞれ自己紹介をしたが、私は公害は終わってはず、原発災害のような史上最悪の公害が起こっており、今後公害の歴史的教訓を若い人たちが継承してくれることを期待していることを述べた。別れ際に私が滋賀大学長時代に国立大学が法人化になり、以後予算が削られ、競争激化で、高等教育は危機に陥っており、改革が必要だと述べた。

(2016 年 9 月 11 日)